

若い世代の言語行動における“femininity”について

今井田亜弓

0. はじめに

人々の言語行動は社会構造から大きな影響を受ける社会活動であり、いつもそれぞれの個人が自由な選択を許されているわけではなく、常にその選択を制限する社会の力が働いている(Fairclough 1989)。女性の言語行動もまた、これら社会的な性別に対する認識が影響を与えており、社会でよいと認められているやり方を取り入れて構築されたものになりがちである(Goffman 1959)。

中村(2004)は、「女性の言語使用に関して、かなり早い時期から特定のことばづかいを戒め、別のことばづかいを奨励する規範化が行われていた」(205)と述べている。しかし男と女を対極的な存在として位置づけ、行動的、積極的な「男」に対して、従順で控えめな「女らしさ」を言語行動において求める傾向は、ジェンダー役割やジェンダー・イデオロギーの変化に伴って変化していると考えられる。

1. 問題点

大学生を対象とした話すことばに関する研究には、井出祥子(1979)による20歳から23歳の大学生の雑談を録音し、¹性差があると思われる言語的特徴を取り出し、その使用頻度を測定した研究がある。²性差があると思われる項目について使用頻度を比較した

¹ 被験者は男性12名、女性13名で、3人から8人のグループ雑談が録音された。

² 井出(1979)は、若者のことばの大部分は両性に用いられており、その使用頻度が大きくどちらかの性に偏っている場合、「男により多く使われることば」、「女により多く使われることば」と考えられ、相対的に見て「男ことば」、「女ことば」があるとし、使用頻度を測定することによって「男ことば」「女ことば」の分類が可能であると述べている。そして絶対的に男女差があるものから、全く両性兼用のもの

今井田亜弓

結果、すべての項目³について男と女のことばの使用差異が観察された。まず女性においては、終助詞の「わ」、「の」、美化語・尊敬語・謙譲語など上品、丁寧なことばの使用が多く観察された。これに対して男性においては、終助詞「ぞ」、「ぜ」、「い」、スラングなど粗野、丁寧でないことばの使用が観察された。また、感嘆詞、擬態語は男性に多く、相づちは逆に女性に多く使用されており、これは男性には「積極的で生彩のある話しかたを持った生き生きとした主体的な発話」が多いのに対し、女性は相づちで相手の話に自分を合わせようとする「他律的な発話」が多いためであると分析している。これらの結果から井出は、「大学生の日常会話には、男女差がなくなっているどころか伝統的役割、男が主で女が従であることを言明することばの上での性差特徴があることが明らかとなつた」(井出1979:14ff.)と述べている。

一方、言語形式に関する女性の言語使用において、女性語、男性語という文化的ステレオタイプのシフトが生じていることを示す調査結果も明らかとなつていている。小林(1993)では、ことばに対する意識や言語形式の使用実態を、娘、母、祖母の三世代間で比較したところ、若い世代の女性の話したことばは、少なくとも文末表現や敬語の使用という面ではいわゆる女性語としての特徴をほとんど持たず、男性のことばに近いものになつてていることが明らかくなつていて。また意識の上では、高校生世代は母親より「女性であるがゆえの自己規制を拒否する」姿勢が強く、「中性的」な自分のことばについて、「その方が言いたいことをはつきり相手に伝えられる」「男性との話しの場で『女ことば』を武器にして得をするという立場をとりたくない」という主張も観察されている。これらの結果から小林は、「女性らしくという規範意識は中年女性も含め希薄になっている」と述べている(1993:187f.)。

また Okamoto(1995)は、女子大学生を被験者として10組の親しい友人同士の「おしゃべり」における文末形式を「男性的・女性的・中性的」⁴に分類し、その頻度を調査した。その結果、すべての被験者において中性的な言語形式が68.8%と最も多く、女性的な文末形式の使用率は12.3%にすぎなかつた。その過半数は“moderately feminine forms”に分類される形式であり、“strongly feminine forms”と分類されたものはわずか

までの間は連続的なものであり、男専用と女専用の両極を結ぶ一直線上のどこの位置にあるかによって、相対的に「男ことば」あるいは「女ことば」があるのだとしている(14f.)。

³ 1. 一人称・二人称・呼称、2. 終助詞、3. だ調／です・ます調、4. 美化語・尊敬語・謙譲語、5. 感嘆詞、6. 相づち、7. 擬態語、8. 倒置、9. 伸ばし表現、10. 途中切れ、11. スラングが分類された(1979:4ff.)。

⁴ 男性的、女性的については、さらに“strongly”と“moderately”に分類された。

若い世代の言語行動における“femininity”について

4.5%と非常に少なかった。⁵一方、男性的な文末形式の使用は18.9%で、そのほとんどは“moderately masculine”に分類されるものであった。⁶会話中には、文末形式以外に“strongly masculine”に分類される表現も使用されており、⁷これらのスピーチスタイルは「中性的」ないし適度に「男性的」と評価された。⁸

このような言語使用における「中性化」(小林1993, Reynolds 1985)は、若い世代におけるジェンダー認識の変化を反映していると考えられる。湯川・廣岡(2003)では、大学生男女を対象として1970年代と1990年代の2つの時点で、男性性格特性と女性性格特性を表すとされる形容詞特性語50個⁹を、調査者に、「男性に当てはまる特性」「女性に当てはまる特性」「男女両方に当てはまる特性」「男女両方に当てはまらない特性」の4カテゴリーに分類することを求めた。1970年代と1990年代の調査結果を比較した結果、¹⁰「明瞭な男性中心のジェンダー規範が減少し、大学生の性の特性についての分類が、性別を意識し伝統的なステレオタイプに沿った認識から、性別や規範に固執しない認識へと変化し、性差も小さくなっている」(『両性具有性』の概念が目指していた男女のあり方を支持する方向へ、少なくとも意識においては変化している)(2003:124f.)と分析している。

また佐竹(1995)は、大学生を対象として、¹¹対立する20組のことばを取り上げて、SD法を用いて「女らしさ」のイメージについて調査した。この結果、「女らしさ」のイメージとして、「上品」、「繊細」、「柔らかい」、「細かい」などが、またイメージの弱いものとして「弱い」、「従属」、「内向的」、「受動的」が挙げられた。被験者の大多数が「女らしさ」に肯定的であったが、男女別に比較すると、「女らしさ」に対するイメージとして、「保守的」、「受動的」だとする値が男性より女性のほうが高く、このことは「男性が『女らしさ』という語に

⁵ 典型的な女性の文末形式として挙げられる「わ」の使用は、そのヴァリエーションを含めてもわずか2例と非常に少なく、この2例はいずれも話し手の母や女性教師の引用として用いられたものであった(1995:304)。

⁶ 助動詞「だ」とそのヴァリエーション「だよ」「だよね」、また動詞あるいは「い形容詞」の後につけられる助詞「よ」。

⁷ 「あいつ」「ばっきやろ」「でかいい」「食う」「ぬかす」「やばい」「やつ(ら)」

⁸ “In sum, the speech styles of the speakers observed in this study are hardly feminine but, rather, neutral to moderately masculine”(1995:305)。

⁹ 「活発な」「自信のある」「かわいい」「冷たい」など全50項目(2003:121)。

¹⁰ 1970年代は1975～1978年を調査時期とし1060名を対象、1990年代は1991～1996年を調査時期とし972名を対象としている。

¹¹ 761名(男性182名、女性579名)

内包されると批判されてきた受動性や保守性をあまり感じていないことを示し」(9)ており、また男性の中には「内向性」「従属型」を「女らしさ」として認識している者も多かったことから、「女子大学生とは対照的である」(1995:13)としている。また女子大学生の中には、数は少ないものの、精神的な自立や自己主張をも「女らしさ」として挙げている者もいたことから、「女子学生の意識にある『女らしさ』は、昔とは違った、新しい意味を持っている」(1995:13)と分析している。

そこで本研究においては、上記の大学生における言語形式の使用頻度の変化やジンダー認識に対する変化を踏まえ、社会における男女の役割の変化に伴って、ジンダーと結びつく言語規範にも変化が見られるのではないかという観点から、日本人大学生を対象として「女らしい」話し方についてのイメージ・意識について調査する。

まず、彼らにとって「女らしい」話し方にはどのような要素が含まれるのかについて、言語的・非言語的特徴¹²を選択し、アンケート調査を実施する。これは、人間のコミュニケーションは多数の要素が含まれる複雑なプロセス(Deaux & Wrightsman 1984:108ff.)であり、言語的要素だけでなく非言語的要素もまたコミュニケーションの重要な側面を担うと考えられるためである。¹³ そして調査によって求められた「女らしさ」を表す尺度が、伝統的な言語規範に基づいているか否か、また同じ若い世代において求められた尺度が性別によって異なり、男女においてイメージに違いが観察されるのかについて分析する。

2. 調査研究の方法

岐阜県内における18歳から20歳(平均年齢は18.6歳、SD=1.07)の大学生計284名(女子学生130名、男子学生154名)を対象とし、質問紙調査を実施した。質問内容の作成に当たっては、愛知県内の女子大学生25名を対象として実施した「女らしい話しかた」についての自由記述における回答を基に、言語行動における言語的・非言語的特徴計48項目を選択した。¹⁴ 調査期間は2006年7月、調査時間は20分である。各自にとつ

¹² 非言語的コミュニケーションの要素としては、「人体」「動作」「目」「バラ言語」「沈黙」「身体接触」「対人的空間」「時間」「色彩」(マジョリー・F・ヴァーガス、石丸正貞1987:16)が挙げられる。

¹³ 言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションは常に同時に起こり、両者は互いに補いあう関係にあるが、この相補関係は複雑で、両者が同じようなメッセージを伝えることもあれば、両者が矛盾しあうこともあり、コミュニケーション全体の70%から95%が、非言語的コミュニケーションだと言われている(金沢吉展1992:79)

¹⁴ 言語的・非言語的特徴の選択にあたっては、「世界の女性語・日本の女性語の進展開を

若い世代の言語行動における“femininity”について

て「女らしい」と思われる話し方のイメージについて、各項目について、「5. かなりあてはまる～1. ほとんどあてはまらない」の5段階で回答を得た。¹⁵

3. 調査結果と考察

3.1 結果

尺度の作成にあたり、天井効果およびフロア効果の見られない48項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化により、7因子構造が妥当であると考えられたため、再度7因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 後の最終的な因子パターンと因子間相関を Table1に示す。なお、回転前の7因子で48項目の全分散を説明する割合は56.15%であった。

求めてー」(井出祥子1993)、『女のことは 男のことば』(井出祥子1981)、「大学生の話ことばに見られる男女差異」(井出祥子1979)、「女らしさのイメージ」(佐竹秀雄1997)、「女らしさにおける男女の意識差」(岸本千秋1997)、「若い女性のことば—論評でつづるその昭和史—」(遠藤織枝1994)、「若い女性の言語行動」(吉岡泰夫1994)、「若い女性のことばの語形・語義の特色」(堀内克明、大森良子1994)、「話し手の方言使用と印象:コードスイッチの適切さと聞き手の出身地による影響」(町一誠、樋口匡貴、深田博己2006)を参考にした。

¹⁵その際、あなたにとって「女らしいと感じられる特徴」を、あまりひとつの質問について考え込まずに選ぶよう依頼した。

Table 1 「女らしさ」尺度の因子分析結果（Promax回転後の因子パターン）

因子 番号	項目 番号	項目内容	因子							
			I	II	III	IV	V	VI	VII	
I	3	表情豊かに話す	.82	.18	-.10	-.12	-.09	.00	.01	
	10	楽しく話す	.71	.19	.00	-.01	-.16	.04	.04	
	2	相手の目を見て話す	.68	.04	.00	-.16	.03	.00	.07	
	5	生き生き話す	.67	.07	.07	-.07	-.05	-.01	.08	
	15	あいさうをうつ	.64	.28	.02	.02	-.08	-.04	-.06	
	16	元気よく話す	.64	-.03	.02	.22	.05	-.04	.10	
	1	身振り、手振り(ジェスチュア)をつけて話す	.57	-.13	-.07	.09	.02	-.03	.00	
	20	「ものすごく」「とても」などの最上級表現を使用する	.56	-.05	-.10	.16	.23	.03	.02	
	21	感嘆詞「えー！」「うそー！」を使用する	.52	-.19	-.10	.38	-.02	-.03	-.14	
	27	相手の気持ちを配慮して話す	.51	.45	-.13	-.21	.12	-.02	.01	
	47	表現のバリエーションをつけて話す	.47	.11	.14	.20	.00	-.05	.05	
	40	こまをはっきり話す	.44	-.02	.35	-.09	-.05	.00	.27	
	4	話す相手に近寄って話す	.41	.01	.12	.19	-.11	.12	.12	
	32	自分の気持ちを素直に伝える	.41	-.13	.40	-.18	.01	-.08	.19	
	43	イントネーションをつけて話す	.40	.05	.20	.31	.01	-.12	.04	
II	23	上品に話す	-.07	.76	-.10	.10	.30	.05	.14	
	9	丁寧なことばづかいをする	.08	.61	.15	-.12	.26	-.10	-.12	
	7	やわらかく話す	.24	.61	.09	.05	-.03	.05	-.21	
	26	教養が感じられる話し方をする	-.07	.54	.01	.13	.38	.06	.22	
	8	かわいく話す	-.07	.53	-.02	.53	-.23	.07	.07	
	13	下品な表現を使用しない	.01	.52	.03	-.05	.12	.22	-.13	
III	48	簡潔に話す	.09	-.13	.71	.02	-.02	-.05	-.03	
	31	発音を正しく話す	.13	.16	.66	-.12	-.06	-.05	.11	
	39	文法的に話す	.06	.09	.58	-.10	.04	.04	.05	
	42	聞き取りやすく話す	.23	.20	.57	-.11	-.11	.01	.08	
	38	小さな声で話す	-.19	.04	.56	.40	.12	.02	-.13	
	46	標準語を話す	.04	.17	.49	.05	.05	.01	.03	
	6	静かに話す	-.12	.34	.47	-.02	.15	-.05	-.22	
	45	ゆっくり話す	.10	.28	.45	.16	-.10	.03	-.13	
	35	他の人から意見を求められたら話すが、自分から発言することはない	-.09	-.21	.37	.18	.28	.10	-.31	
IV	30	語尾を延ばす(「私はあ」「それでえ」)	-.03	-.12	-.10	.69	-.03	.05	.09	
	41	高い声で話す	.07	.16	.03	.67	-.07	.07	.10	
	44	質問するわけではないのに、しり上がりのイントネーションにする	.19	.11	-.09	.66	.12	-.09	.04	
	12	「たわわ」のよ」という語尾を使用する	-.33	.14	.08	.44	.22	-.05	.01	
	22	「でも」で話を始めることが多いという印象がある	.31	-.15	-.08	.38	.28	.04	.04	
V	28	敬語を使用する	.06	.27	.08	-.13	.65	-.08	.05	
	11	「一です」よりも「なんです」を多く使用する	-.09	.18	.10	.12	.60	-.17	-.09	
	25	大学と家庭での話し方を区別する	-.13	.20	-.12	.21	.60	.00	.15	
	24	自分と相手の「社会的関係」を考えて話す	.12	.26	-.11	-.11	.51	.04	.00	
VI	33	ぞんざいなことば(「うまい」「食う」などを)を使用しない	-.05	.17	.04	.05	-.16	.76	.06	
	34	「たど」「だぞ」という語尾を使用しない	-.06	.13	-.10	.06	-.01	.68	-.01	
	17	短縮語を使用しない	-.01	.08	.25	-.18	.16	.41	-.04	
	19	「流行語」を使用しない	.20	-.06	-.05	-.08	.32	.38	-.16	
VII	36	自分から率先して話す	.41	-.06	-.03	.23	-.03	.00	.50	
	29	自分の判断や意見をはっきり言う	.45	-.16	.14	-.08	.11	.09	.47	
	37	自己主張をする	.38	-.24	.11	.15	.18	-.05	.41	
	因子間相関			I	II	III	IV	V	VI	VII
				I	—					
				II	24	—				
				III	53	47	—			
				IV	.15	-.11	.03	—		
				V	.34	.13	.55	.17	—	
				VI	.24	.41	.47	.02	.33	—
				VII	.09	.16	.17	-.28	.00	—

注1:小数点省略

注2:どの因子にも絶対値.35以上の負荷量を示さなかった2項目は削除して記載した

若い世代の言語行動における“femininity”について

まず第1因子は、「楽しく」、「生き生き」、「元気よく」など明るく元気な様子や、「表情豊かに」、「表現のヴァリエーションをつけて」、「身振り、手振り(ジェスチュア)をつけて」、「ことばをはつきり」、「最上級表現(「ものすごく」、「とっても」)を使用する」「感嘆詞(「えー！」「うそー！」)を使用する」など表情・表現豊かな様子を含むほか、「自分の気持ちを素直に」、「相手の気持ちを配慮して話す」、「相手の目を見て話す」、「相づちをうつ」、「話す相手に近寄って話す」という対話への積極的な参加意思も感じられることから、「積極的で生彩のある話しかた」と命名した。

第2因子は、「上品に話す」、「丁寧なことばづかいをする」、「やわらかく話す」、「教養が感じられる話し方をする」、「下品な語や表現を使用しない」などの項目からなり、これらは品格を重んじた話し方と解釈できるため、「品のよい話しかた」と命名した。

第3因子は、「簡潔に」、「発音を正しく」、「文法的に正しく」、「聞き取りやすく」、「標準語で」、「静かに」、「ゆっくり」、「他の人から求められたら話すが、自分から発言することはしない」などからなり、これらはいずれも聞き手にわかりやすいようにという配慮がうかがえる。従って「聞きやすい話し方」と命名した。

第4因子は、「だわ」「のよ」という女ことば特有の語尾の使用、「私はあ」「それでえ」などの語尾延ばし、「でも」の多用、「高い声」、「しり上がりのイントネーション」からなり、これらはいずれも女性のステレオタイプと捉えられやすく、女性という性を強調するイメージがあるため、「性を強調した話しかた」と命名した。

第5因子は、「社会的関係を配慮した話しかた」、「大学と家庭などウチとソトの区別をする話し方」、「敬語の使用」など、いずれも話し相手と自分との関係を把握し、それに応じたことばづかい(敬語を含む)をすることと解釈できるため、「話し相手との関係を考慮した話しかた」と命名した。

第6因子は、「だろ」「だぞ」という文末形式の回避、「うまい」、「食う」、「腹が減る」などのぞんざいなことばの回避、「短縮語・流行語の使用回避」という項目からなり、これらはいずれもことばを選んで使用することと解釈できる。従って「ことばを選んだ話しかた」と命名した。

第7因子は、「自分から率先して話す」、「自分の判断や意見をはつきり言う」、「自己主張をする」からなり、いずれも「自分」が対話において主導的な役割を果たすことと解釈できるため、「主導性を發揮した話しかた」と命名した。

各因子解釈の内容をまとめて表示すると次のようになつた。

今井田亜弓

- 因子 I「積極的で生彩のある話しかた」
- 因子 II「品のよい話しかた」
- 因子 III「聞きやすい話しかた」
- 因子 IV「性を強調した話しかた」
- 因子 V「話し相手との関係を考慮した話しかた」
- 因子 VI「ことばを選んだ話しかた」
- 因子 VII「主導性を發揮した話しかた」

上記7つの尺度に相当する項目の平均値を算出した。そして各因子尺度の内的整合性を検討するために、それぞれの α 係数を算出したところ、ほぼ十分な値が得られた(Table 2)。

Table 2 「女らしさ」尺度の平均・SD および α 係数

		平均	SD	α 係数
因子 I	積極的で生彩のある話しかた	3.37	0.63	.90
因子 II	品のよい話しかた	3.49	0.76	.83
因子 III	聞きやすい話しかた	2.93	0.64	.85
因子 IV	性を強調した話しかた	2.80	0.69	.69
因子 V	話し相手との関係を考慮した話しかた	2.99	0.76	.73
因子 VI	ことばを選んだ話しかた	3.22	0.85	.73
因子 VII	主導性を發揮した話しかた	2.28	0.54	.73

それぞれの尺度の相関を以下(Table 3)に示す。7つの尺度は、「性を強調した話しかた」と「ことばを選んだ話しかた」、「ことばを選んだ話しかた」と「主導性を發揮した話しかた」間には有意な相関が見られなかったが、それ以外の尺度については、互いに有意な正の相関を示した。

若い世代の言語行動における“femininity”について

Table3 「女らしさ」尺度間相関

	積極的で生彩のある話しかた	品のよい話しかた	聞きやすい話しかた	性を強調した話しかた	話し相手との関係を考慮した話しかた	ことばを選んだ話しかた	主導性を発揮した話しかた
積極的で生彩のある話しかた	—	.41**	.57**	.25**	.34**	.28**	.64**
品のよい話しかた		—	.63**	.18**	.50**	.55**	.19**
聞きやすい話しかた			—	.19**	.55**	.53**	.34**
性を強調した話しかた				—	.23**	0.03	.20**
話し相手との関係を考慮した話しかた					—	.40**	.25**
ことばを選んだ話しかた						—	0.11
主導性を発揮した話しかた							—

次に男女差の検討を行うために、「女らしさ」の尺度得点について t 検定を行った。その結果、「品のよい話しかた」($t(277) = -3.03, p < .05$)、「話し相手との関係を考慮した話しかた」($t(281) = -2.89, p < .05$)について、男性よりも女性のほうが有意に高い得点を示していた。「積極的で生彩のある話しかた」($t(274) = -0.09$)、「聞きやすい話しかた」($t(277) = -0.44$)、「性を強調した話しかた」($t(280) = -0.77$)、「ことばを選んだ話しかた」($t(281) = -0.56$)、「主導性を発揮した話しかた」($t(280) = 1.91$)尺度については、男女の得点差は有意ではなかった(Table 4)。

Table 4 男女別平均とSDおよびt検定の結果

	男性		女性		T 値
	平均	SD	平均	SD	
積極的に生彩のある話しかた	3.36	0.65	3.37	0.60	-0.09
品のよい話しかた	3.36	0.70	3.63	0.80	-3.03*
聞きやすい話しかた	2.92	0.62	2.95	0.66	-0.44
性を強調した話しかた	2.83	0.70	2.76	0.67	0.77
話し相手との関係を考慮した話しかた	2.86	0.75	3.12	0.76	-2.89*
ことばを選んだ話しかた	3.20	0.83	3.26	0.86	-0.56
主導性を發揮した話しかた	2.34	0.57	2.22	0.48	1.91

3.2 考察

「女らしい」話し方の尺度として7因子が抽出された。まず男女ともに「品のよい話しかた」(因子II)が「女らしい」話しかたに対するイメージとして最も平均値が高いことが明らかとなった。話しかたが「品がよい」と感じられる要素としては、項目にある「ことばづかいが丁寧」であり、「下品なことばや表現を使用しないこと」が挙げられる。このような丁寧なことばづかいは、教養を感じさせる話しかたにも関係がある。また項目にある「やわらかい」というイメージは、佐竹(1995)における日本人大学生を対象に行った「女らしさ」に対するイメージ調査においても、「イメージが強い項目」として挙げられたものである。丁寧なことばづかいには相手への思いやりから発する婉曲語も含まれ(井出1981:102f.)、これらは「やわらかい」イメージを与えると考えられる。またこの因子には「かわいい」¹⁶というイメージが含まれるが、これは「やわらかい」と同様に、身体的、心理的な“powerlessness”を連想させ、日本文化が女性に期待する「女らしさ」に結び付けて考えられる。¹⁷従つて、これらは日本の伝統的な「女らしい」言語行動の規範が、現代の大学生においても有効であることを示している。

¹⁶但し、2つの項目の記述統計量を見ると、「やわらかい」は女性では第3位(3.91)、男性では第5位(3.64)であるが、「かわいい」は女性では第8位(3.61)に対して男性では第1位(3.72)となっている。類似の結果として、岸本(1997)では、「女らしさ」の条件の一つとして男女ともに「かわいい声」を選択したが、男子のほうがより強く意識している(男子74.2%、女子58.7%)ことが明らかとなっている(29頁)。

¹⁷Smith 1992、van Bezooijen 1995参照

若い世代の言語行動における“femininity”について

上記の因子IIに含まれている「上品に話す」、「丁寧なことばづかいをする」という項目は、因子VIの「ことばを選んだ話しかた」においても高い負荷を示していること、また因子VIは因子IIと相関が高い（相関値.55**）ことから、この2つの因子は関連付けて解釈する必要がある。因子VIにある「だろ」「だぞ」という「男ことば」の特徴として挙げられる文末形式や、ぞんざいなことば、短縮語、流行語の使用を避けることは、下品なことばづかいを回避することと解釈されるため、因子IIの「品のよい話しかた」に関連する。江戸時代には、「流行語・下品なことば」（『新撰女倭大学』1785）、「男ことば・漢語・流行語」（『女重宝記』1692）が、また昭和においては「ぞんざいな口の利き方・流行語」（柳八重1934）、「新語・流行語・漢語」（檀みち子1943）が女性に戒められ、丁寧なことばづかいが奨励されている¹⁸ことから、因子IIと同様に伝統的な女性の言語使用における規範と捉えられる。

この2つの因子とは全く異なる「女らしさ」の尺度として、因子IIと同様高い平均値を示す因子I「積極的で生形のある話しかた」の尺度が挙げられる。この因子は、「元気よく・明るく・生き生きと話す」、「自分の気持ちを素直に表現する」という項目を含み、また「表情・表現・ジェスチュアなどが豊か」で、「感嘆詞・最上級表現を使用する」など躍動感に溢れた活動的なイメージを与える。伝統的な日本女性のイメージが、「控えめ」、「おとなしい」、「従順」、「受身」という語彙で表現されるのに対して、¹⁹ 上記の項目に挙げられる語彙は全く異なる話し方を連想させる。またこの尺度には、因子IIにも高い負荷をもつ「相手の気持ちを思いやる」「相手の目を見て話す」²⁰「相手に近寄って話す」²¹という項目が含まれているが、これらは対話を継続する意図を開き手に対して示す合図と考えられ、能動的に対話に参加しようとする意識がうかがえる。また「相づち」も同様に、

¹⁸遠藤1994、1997参照

¹⁹『現代形容詞用法辞典』においても、「しとやか」「おくゆかしい」などが女性特有の性格と言動を表現した形容詞として説明されている。女性が活動的でなく、自分の内面のすべてを表さず、自分の欲求を表に出さないことをプラスに評価する日本文化ならではの語であるといい、こうした女性に対する美意識の思想は、ずっと生活の根底を支配するイメージのひとつとしていき継けているように思われる（田野村 1995:53）

²⁰「お互いがしつかりと見詰め合うことが、コミュニケーションのチャンネルの開設を意味する」（マジョリ一・F・ヴァーガス、石丸正訳1987:82ff.）

²¹金沢（1992）では、「距離と新密度の間に相關関係があり、近ければ近いほど親密な間柄であり、遠ければ遠いほど疎遠で、相手を名前や人格のある一人の人間として扱うのではなく、ただの個体として扱うことになる」（91）のだとしている。従って、「相手に近寄って話す」ことは、話し相手に心を開いていることと解釈できる。

今井田亜弓

「対話における受動的な役割」を果たすというより、「話し手の伝達内容と伝達態度に対する評価」を示す対話への参加意思の表れと捉えられる。²²この因子の平均値が高いということは、「女らしさ」に対する認識が変化していることを示しており、女性にとっては従来の伝統的な言語規範からの解放と解釈できる。また男性においては、この因子Ⅰが因子Ⅱの「品のよい話しかた」と同様最も高い平均値を示していた。このことは、「女らしさ」に対する意識変化が女性だけではなく男性においても表れていることを示しており、若い世代におけるジェンダー認識の変化と捉えられる。

上記因子が男女ともに高い平均値を示したのに対し、男女で大きな相違が見られたのは、因子Vの「話し相手との関係を考慮した話しかた」である。この尺度には、社会的な関係や公私の区別がある話しかた、敬語の使用という項目が含まれる。話し手と聞き手の社会的な関係の認識、「ウチ」と「ソト」の区別とそれらに応じたことばづかいは、日本語の特徴と捉えられる。小林(1993)は、「場面や相手に応じてそれにふさわしいことばを使おうとする意識は、世代、男女にかかわらず強かった(中略)若い女性たちが、将来就職・結婚によって置かれる状況や人間関係が変化したとき、その中で、場や相手にふさわしいものとして、いわゆる女性らしいことばを使うようになる可能性も皆無ではない」(191)と述べている。本研究における女子大学生においては、この因子の平均値が女性においてとりわけ高く、男女間で有意差が観察されていることから、場面や相手に応じた話しかたをすることは「女らしい」話し方であるという認識を強く持っているといえる。

これに対して、有意差こそ観察されなかつたものの、女性より男性において平均値が高かつた尺度として因子IVの「性を強調した話しかた」と因子VII「主導性を発揮した話しかた」が挙げられる。まず因子IVには、伝統的な「女ことば」の特徴として挙げられる文末形式の使用、²³「高い声」の使用、²⁴「しり上がりのイントネーション」(井出1981:98f.)、²⁵「語尾のぼし」²⁶が含まれている。しかし先行研究の結果が示すように(Okamoto 1995、

²² 小矢野(1994)は、相づちには、話し手の伝達内容と伝達態度を受け取る側の評価が伴っており、そこにも女子大学生のリズミカルでノリのいいおしゃべりの特徴があると述べている(52)。

²³ 「だわ」「のよ」

²⁴ "the preferred pitch for women is relatively high in Japan"(van Bezoijen 1995:264).

²⁵ 「アメリカ女性にとって典型的な特徴であり、不安な気持ちを表す。あがったイントネーションの余韻の意味することはそれを下げてもらいたいと言う話者の希望を叙述していると同時に相手に同意を求めている。女性は世の中で男性に付隨し、順応する機能をもたされてきたので、女性は男性に最終的判断を任せるような言い方が身についている」(井出1981:99)。

²⁶ 金田一春彦(1993)は、若者の話しことばの特徴として「語尾延ばし」を挙げており、これは「常に相手

若い世代の言語行動における“femininity”について

尾崎(1997)、若年層の女性による「わ」の使用は減少している。²⁷また声の高さについては、今井田(2006)²⁸において被験者である女子大学生全員が、他の言語(英語・ドイツ語)より日本語において高い声を用いていたわけではなく、また同一被験者における日本語と他の言語間のピッチ差も大原(1993)²⁹と比較して小さくなっていたことから、「中性化」の傾向と捉えられた。このことは、上記のような一般的に「女ことば」のステレオタイプと捉えられる特徴は、実際の女性の言語行動とは必ずしも一致しておらず、本研究における女性被験者においてもこの因子の平均値が低かったことから、女性被験者は、これらの特徴を「女らしさ」を表現する話しかたとして認識することをむしろ拒否する傾向にあるのではないかと考えられる。また男性被験者においては、他の因子より平均値は低いものの、女性被験者と比較するとこの因子の平均値は高いことから、これらの特徴はむしろ男性に好ましいとされてきた女性のステレオタイプではないかと分析できる。

因子VIIでは、因子Iで「明るく・積極的に」対話に参加するイメージが「女らしい」と評価される一方、「自分から率先して話す」、「自分の判断や意見をはつきり言う」、「自己主張をする」など対話の主導的役割を担う話しかたは、平均値が示すように男女ともに「女らしい」という評価が低く、社会における性役割が変化しているとはいえ、とりわけ女性被験者には「女らしい」と評価されにくい話し方イメージであるということが明らかとなつた。

4. まとめ

本研究においては、日本人大学生男女を対象に、彼らがどのような話しかたを「女らしい」と認識しているかについて、様々な言語的・非言語的特徴について調査を行い、ジェンダーと結びつく言語規範を明らかにすることを試みた。

その結果、最も重要な話しかたイメージとして「品のよい話しかた」が挙げられた。この

の注意を自分にひきつけたい、まだここで話はおわっていないのでよ」という効果をもつ語尾「ネサヨ」の代替表現ではないかと推論している。

²⁷Okamoto(1995)における女子大学生では、女性的よりむしろ中性的な言語形式が頻繁に使用されていたこと、また職場で働く女性のことばを分析した尾崎(1997)では、終助詞「わ」の使用について、「衰退に向かっている、ないしはある程度衰退し安定期にある」と分析されている。

²⁸女子大学生25名を被験者として、日本語、英語、ドイツ語で同じ意味を表すテキストを読ませ、その基本周波数を測定し比較した。

²⁹大学生男女各6名(日本語を第1言語とし、英語が堪能である)を対象に英文、日本文各10文を読ませ基本周波数を測定した。

今井田亜弓

中には、「多くの言語に共通する女性語の特徴」(井出1993:9)、³⁰とりわけ日本文化における「女ことば」の特徴とされる「言語表現のやわらかさ」、³¹「丁寧なことばづかい」、「男ことばの使用回避」³²が含まれており、本研究における大学生男女においても、伝統的「女ことば」規範を「女らしい」話しかたのイメージとして強く持っていることが明らかとなつた。

一方、「女らしさ」を表現する新しい尺度として、本研究においては「積極的で生彩のある話しかた」が得られた。これは伝統的ステレオタイプとして挙げられる「女性の他律的発話」(井出 1993:20f.)とは全く異なるイメージであり、むしろ主に男性の話しかたの特徴とされた「生き生きとした主体的な発話」へ近づく傾向と理解できる。このことは、女性の言語使用が「中性化ヘシフト」していると捉えられる一因ではないだろうか。従来の「おとなしい」、「控えめな」、「受動的な」話しかたから、「生き生きとした」発話が若い世代においては男女ともに「女らしさ」として肯定的に捉えられており、このことは言語使用のみならず言語意識においても従来の伝統的な規範に基づく「女らしさ」「男らしさ」という分類が、若い世代においてはもはや同じ意味を言い表さない可能性を強く示している。

高橋(1995)は『『女らしさ』とは、女性が女性であることの意味を追求し、自身を磨くパロメーターとして使用している語であり、『女らしさ』は時代によって変化する、時代によって要求されるようが違うが違い、模索される意味を変容させていく様相である』(1995:57ff.)と述べている。

本研究では、18歳から20歳の大学生男女を対象として調査を行ったが、年齢、職業など対象者の様々な属性によって調査結果に変化が見られる可能性もある。また「女らしさ」を「魅力的な自己表現のパターン」(佐竹1995:2)として捉えれば、場面・状況・相手によって、それぞれが表現したいイメージも異なると考えられる。³³これらを明らかにするには、イメージ・意識調査の結果と言語使用の実態を比較分析する必要があろう。

³⁰井出祥子(1993)では、多くの言語に目立つ女性語の特徴として、「言語表現の柔らかさ(語尾表現・イントネーション、バラエティや婉曲表現を多用)」、「ぞんざいな表現・下品な表現・規範からの逸脱形・礼儀を欠いた表現の回避」を挙げている(1993:9)。

³¹「女性独特的の柔らかな話し方」(矢崎源太郎1960)

³²「口数少なく、男ことばを用いないこと」(「女重宝記」1692)

³³Women strategically choose particular speech styles to communicate desired pragmatic meanings and images of self(Okamoto 1995:317).

参考文献

- 遠藤織枝(1994) 「若い女性のことば—論評で綴るその昭和史」『日本語学』13
(10):19–32.
- (1997) 『女のことばの文化史』学陽書房
- Deaux, Kay & Wrightsman, Laurence S. (1984) *Social psychology in the 80s*.
Brooks/Cole Publishing company, Monterey, California.
- Fairclough, Norman(1989) *Language and Power*. London and New York: Longman.
- 堀内克明、大森良子(1994) 「若い女性のことばの語形・語義の特色」『日本語学』
13(10):72–80.
- Goffman, Erving(1959) *The presentation of self in everyday life*. New York Garden City,
N.Y.:Doubleday.
- 井出祥子(1979) 「大学生の話しことばに見られる男女差異」昭和54年度科研費ペン
グ、フレデリック・シイ班中間報告『談話行動に見られる男女の差
異』(課題番号410221)、1–23.
- (1981) 『女のことば 男のことば』日本経済通信社
- (1993) 「世界の女性語・日本の女性語—女性語の進展開を求めて—」
『日本語学』臨時増刊号、明治書院
- 今井田亜弓(2006)「若い日本人女性のピッチ変化に見る文化的規範の影響」『言語
文化論集』27–2、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、13
–26.
- 金沢吉展(1992) 『異文化とつき合うための心理学』誠信書房
- 金田一春彦(1993)『日本語は京の秋空』スタジオ・シップ
- 岸本千秋(1997) 「女らしさにおける男女の意識差」平成7~8年度科学研究費補助
金研究成果報告書『「女らしさ」の意味・用法・イメージの記述的研究』、武庫川女子大学、29–36.
- 小林恵美子(1993)「世代と女性語—若い世代のことばの『中性化』について」『日本
語学』12(5):181–192.
- 小矢野哲夫(1994)「女子大学生のキャンパスことば」『日本語学』13(10):45–53.
- 中村桃子(2004) 『ことばとジェンダー』勁草書房
- 町一誠、樋口匡貴、深田博己(2006)「話し手の方言使用と印象:コードスイッチの適
切さと聞き手の出身地による影響」『社会心理学研究』21(3):
173–18

- 大原由美子(1993)「『女ことば』のピッチー日英語の比較ー」『日本語学』12(5):141-147.
- Ohara, Yumiko (2004) "Prosody and Gender in Workplace Interaction: Exploring Constraints and Resources in the Use of Japanese." In S. Okamoto and Janet S. Shibamoto Smith (Eds.), *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People*. New York: Oxford University Press, 222-239.
- Okamoto, Shigeko(1995) "Tastless" Japanese: less "feminine" speech among young Japanese women. In Hall & Buholtz (eds.) *Gender Articulated: Language and the socially constructed self*. New York: Routledge, 297-325.
- 尾崎喜光(2004) 「日本語の男女差の現状と評価意識」『日本語学』23(6):48-55.
- Reynolds, Katsue A.(1985) Female speakers of Japanese. *Feminist Issues* 5, 13-46.
- 佐竹秀雄(1997) 「女らしさのイメージ」平成7~8年度科学研究費補助金研究成果報告書『「女らしさ」の意味・用法・イメージの記述的研究』、武庫川女子大学、3-14.
- Smith, Janet S.(1992) Women in charge: Politeness and directives in the speech of Japanese women. *Language in Society*, 21, 59-82.
- 高橋博美(1995) 「ファッション雑誌における『女らしさ』」平成7~8年度科学研究費補助金研究成果報告書『「女らしさ」の意味・用法・イメージの記述的研究』、武庫川女子大学、37-46.
- 田野村千寿子(1995) 「大正期の『女らしさ』—雑誌『女性』を資料として—」平成7~8年度科学研究費補助金研究成果報告書『「女らしさ」の意味・用法・イメージの記述的研究』、武庫川女子大学、47-54.
- Vargas, Marjorie F. (1986) *Louder than words: an introduction to nonverbal communication*. Iowa State University Press. 『非言語(ノンバーバル)コミュニケーション』(石丸正／訳、新潮選書、1987)
- van Bezooijen, R.(1995) Sociocultural Aspects of Pitch Differences between Japanese and Dutch Women. In *Language and speech*, 38 (3), 253-265.
- 吉岡泰夫(1994) 「若い女性の言語行動」『日本語学』13(11):33-44.
- 湯川隆子、廣岡秀一(2003) 「大学生のジェンダー認識—1970年代と1990年代の比較」『心理学とジェンダー』有斐閣